野球を明るく楽しく

アテネ大会で監督代行　中畑清さん

コロナ禍のため無観客で7月17日に行われたトークショー「中畑清氏のアテネ五輪話」で、中畑氏を取材しました。当日の様子は文京区民チャンネル等で放送されました。

長嶋さんに憧れ

中畑清さんは、子どもの時に長嶋茂雄さんに憧れて、野球選手になりました。昔、野球はオリンピックの種目にありませんでした。（出場した）アテネオリンピックでは負けられずつらかったけれど、プロ野球は負けても次があるので楽しかった。でも、現役時代に死にそうなくらい練習したので、もうその環境に戻りたいとは思っていません。

（小４／黄智宏）

中畑清さんと記念撮影するこども記者

金メダルへの期待高く

中畑清さんはとても明るく、楽しい人です。アテネオリンピックで長嶋ジャパンの監督代行を務めました。当時のジャパンは金メダルを取れる、とファンからの期待が高く、いい体験ができたと話していました。野球はチーム競技なので、人間性が大切です。監督時代はコミュニケーションを取ることを第一にしていました。試合以外でも話す言葉が違う国籍の人とのコミュニケーションが必要で、苦労したのではと思いました。

（小５／根本梨咲）

世界の人に伝えたい

中畑さんはカレーライスやラーメンを試合前に食べると、とても元気が出るそうです。長嶋茂雄選手にあこがれて野球を始め、今は、野球を世界の人に伝えたいと考えています。２００４年のアテネオリンピックでは「長嶋ジャパン」の監督代行として、銅メダルをとりました。チームではしんけんに思いっきりケンカをして、本気でゴメンね、と謝れる気持ちになってから仲直りし友達になるそうです。中畑さんはぼくたちに歌も作ってくれておどろき、とても感動しました。

（小５／松本匠平）

友達と同じ経験を

元プロ野球選手の中畑清さんにインタビューしました。初めてプロ野球選手に会ったのでちょっとドキドキしました。プロ野球選手になりたかった理由は、友達をたくさん作って同じけいけんをしたかったからと言っていました。僕は中畑さんに会ってもっとスポーツやオリンピックのことを知りたくなりました。

（小４／ＫＯＵＫＩ）

投手の頑張りが大事

中畑清さんはオリンピックの野球チームについて「特に投手が頑張らないとなかなか勝ち試合を作れない。点を与えないための守りの中心が投手。投手の中にも先発、中つぎ、おさえと役割分担がちゃんとある。注目の山本由伸投手をどう使って勝ち試合を作っていけるか期待している」。ぼくも各国の投手の使い方に注目して野球を観戦したいです。

（小５／小濱智）

スポーツ半分以上

中畑清さんは「オリンピックに野球は必要！まだ野球は世界で半分くらいしか浸透していない。続けていかないと」と教えてくれました。それにはたくさんの人の努力が不可欠だと感じました。また野球では「年代によるコミュニケーションの取り方の違いを知る努力をする」ことを心掛けているそうです。「子どもたちには勉強半分、スポーツ半分以上になって欲しい」という想（おも）いを、私もつないでいきたいです。

（小６／山下楓莉）

五輪とプロの違い

中畑清さんは「とても背が高い」と思いました。特に面白かった話は、オリンピックとプロ野球の違いです。オリンピックは、負けたら終わりなのに対して、プロ野球は負けてもまた次にチャンスがあり、楽しくて仕方なかったそうです。オリンピックのプレッシャーの中で戦うプロ野球選手を応援したいと思いました。

（小５／数田麻華）

野球殿堂博物館を見学

209人が殿堂入り

野球殿堂博物館は、1959年に、後楽園球場の横にできました。最初は、「野球体育博物館」だったそうです。野球殿堂入りした209人のレリーフは、殿堂ホールにかざられています。野球の発展にたずさわった人がこんなにいるんだなと感動しました。

（小５／小澤一葉）

一番高価なものは

この博物館で一番値段が高いものについて、学芸員さんは「アメリカと日本では高く売れるものは違い、アメリカでは昔のヤンキースの選手のユニホームが一番高いと聞いたことがある」と言いました。でも、みんなの宝物なので、今まで売ったことはないそうです。（小４／押田櫂）

投手交代は車に乗り

後楽園球場から東京ドームになって、プロ野球の試合では使われなくなったものがあります。リリーフカーと呼ばれる小さな車で、投手交代のときに、次の投手がこの車に乗り、ピッチャーマウンドまで運ばれていました。ブルペンがベンチに近くなった今は使われていません。

（小５／福島實人）

代表ユニホームも

学芸員のせきぐちたかひろさんの説明では、展示品を集めるのには許可が必要だそうです。サムライジャパンのユニホームもありました。戦争で亡くなったプロ野球選手の名前を見て「戦争は嫌いだ」と思いました。

（小４／ＡＯＩ）

野球博物館で取材するこども記者たち

三振取って気持ちいい

少年野球チームに入っている僕が興味を持ったのは、ピッチャーの役割の歴史です。ピッチャーは昔は、ゆるくて打ちやすい球を、打ってもらう役割でした。それではつまらないため、打ち取る役割になったそうです。僕は打ち取る仕事がいいです。三振を取るのが気持ちいいからです。

（小５／松田隆之介）

変わっていくグラブ

道具の展示の中で、グラブの変化が面白いと思いました。元々は、素手でボールを取っていたそうです。最初のグラブは衝撃をあまり弱められない鍋つかみのような形でキャッチすると痛そうです。親指と人差し指の間の大きな網がありません。今は、頭上や足元のボールも取れるように、グラブの指は手の指より長くなっています。

（小５／木村夏央）

頑張る姿が浮かぶ

野球殿堂博物館にはプロ、大学、高校、女子など日本の野球に関係する物が展示されています。今年の東京オリンピック日本代表に関する物も展示されていました。実際のユニホームや靴などを見ると頑張っていた姿が見えるような気がしました。新しい物を飾ることができる博物館だというのが印象的でした。

（小５／田中沙英）